

No.23

東京文化資源会議

「ティーチャ」

T-Cha

東京文化資源会議

Tokyo Cultural Heritage Alliance

ニューズレター

Maruro Yamashita



Hiroko Kuboki



Ayane Kusanagi

@Our thoughts on Jimbocho



左から、山下丸郎さん、久保木浩子さん、草薙彩音さん

町に関わる
人達が考える
「神保町」の
魅力や
これからの
可能性

歴史ある文化地域の神保町では、以前に比べて外国の方や若い世代が町を練り歩く姿が増えました。アートブックや絵画、サブカルチャーやアニメ、マンガといった日本を代表する文化への興味関心や、昔ながらの街並みが残る神保町に価値を感じる人が増えているようです。ここ数年、デザイン性に富んだカフェや新たなカルチャーの発信拠点が誕生するなど新しい町の担い手が登場しつつあります。町を面白がる新たな世代が、これまでとは違った神保町の価値や可能性に注目しつつあるようです。

神保町シアターの裏手にある stacks bookstore。本や写真集、雑貨にレコード、zineの発行など注目のカルチャーを発信し、クラフトビールやナチュラルワインを店内のバースタンドで語らうこともできます。代表の山下丸郎さんは神保町の出版社で働いた経験を持ち、その後パレルを経て制作会社を立ち上げ、渋谷で設立した同スペースを24年3月



から神保町に移して活動しています。「もっと広い場所で店舗を運営したい」と思い、アクセスの良さやこれまでに縁のあった神保町を、と考えて移ってきました」(山下さん)

神保町の雑居ビルにあるバー「ホンジツ」。店内ではアナログのレコード音源が流れるゆったりとした時間に包まれながら、お酒やお茶を楽しむことができます。同店を運営する久保木浩子さんは、会社員を経て飲食店を経験した後、22年冬に同店をオープン。久保木さんも偶然に同ビルの空きを見つけ、大家さんと交渉し店舗を出すことになったという。



「神保町は以前から遊びに来ていた好きな町で、いつかお店を出すならここで、と考えていました。テナントは元々皆さんの場所で、地元の人も含めて一般の人が中に入ったこともなかったと聞いています」(久保木さん) 共立女子大学で建築やデザインを教える草薙彩音さん。学生時代から神保町に通っていました。京都の設計事務所を経て教員として神保町に戻り、改めて神保町の魅力や価値に気づいたと話します。草薙さんもSofaやホンジツのような20代から40代までが楽しめる店舗が増え、特に女性も足を運びやすい拠点がここ数年で増えてきたことによる町の変化を肌で感じているという。

ジでしたが、最近はこのまでの神保町とは違った姿が生まれている期待感があります。古書店のような昔からあるものだけでなく、新たなカールチャーの地下が生まれつつあるのかもしれない(草薙さん)

時代とともに
移り変わる町の様子

新型コロナウイルス流行以前から外国の方が神保町を訪れる姿は目にしていましたが、インバウンドとともにますます外国の方が行き交う様子が増えました。山下さん曰く、以前から外国の方の神保町に対する人気は高かったと話します。

「海外のアパレルの方が日本を訪れた際には、例えば南洋堂のようなデザイン関連の専門書を扱う古書店に足を運ぶ人も多くいました。SNSが広がる以前から、業界関係でも神保町の様子は口コミで広がっていたようです。私もよくあちらこちら案内した経験があります。インバウンドとともに、神保町を中心に古書やアート関係の注目は年々高まっているように思います」(山下さん)

イストらが神保町に集い始めていると草薙さんは話します。「都市部では大型チェーンや大資本の店舗が広がり均質化が起きつつあるなか、神保町は個人経営の個性豊かな街並みが広がっていて、そうした価値を感じる若い層が注目しているように思います」(草薙さん)

個人経営がゆえに、オーナーの思いや個性が色濃く反映しやすい神保町のお店。オーナー自身も、顔が見える関係を大切にしています。だからこそ、お客もオーナーとの関係性を築くことができ、神保町をより楽しむきっかけになることでしょう。しかし、これまで神保町の文化を築き上げてきた個人商店が、新型コロナや建物の耐震問題をきっかけに減ったという事実もあります。一方、そうした社会の変化に応じて、町そのものが変化することを前向きに捉えることも大切ではないかといった意見も飛び交いました。

要因として、渋谷まで電車で15分の距離にあり都内各所のハブとしても使えるアクセスの良さがあります。神保町を中心に半径数キロ圏内を目を向ければ、本郷、秋葉原、東京、上野に囲まれ、都心を自転車一つで移動できるほどです。「近所や近郊に住んでいる方がふらっとお店に遊びに来てくれることもある」と久保木さんも語り、改めて神保町の立地の良さを感じさせられます。

一方で、神保町をいかに楽しむかという情報が少ないことがネックでもあります。書店一つとっても、外観だけではどのような店舗かを理解することはハードルが高い。また、雑居ビルや路地裏にいくつもの店舗が点在しており、情報なしに探すのは一苦労かもしれません。

「最近店舗やオーナーのSNSでの情報発信も増えてきましたが、まだまだ神保町は中に入っていないとその面白さを実感することは難しいかもしれません。けれども、きっかけさえあればそれぞれが持つ興味関心や深掘りしたいテーマをとことん追求できるのが町の魅力」(草薙さん)

問口の広さと探求できる奥深さの両面を持つ神保町。そして、多様な専門性をもった人達と出会える場でもあります。町の価値を知ってもらうための仕掛けを考えていくことが、町に新たな人を呼び込むヒントになりそうです。

山下さんが運営するSofaでは、これから積極的にイベントを展開しながら、新しい人を呼び込む仕掛けを企画しているとのこと。「神保町は色んなものが生まれる種が広がっています。自身の好きなものを発信しながら、色んな人とのコミュニケーションのハブになれば」。

さらに「神保町にもっと飲みに来る人が増えてほしい」と語る山下さん。神保町には日本酒やワインを取りそろえた個性豊かなお店が軒を連ねており、じっくりと友人らと語る場所も増えてきました。昼だけでなく夜も楽しめる神保町という町の魅力をしつかり伝える必要があります。

久保木さんも「夜の町を楽しむ一つとして、映画館などの存在も欠かせません。閉館した岩波ホールを懐かしむ声も多く、夜の盛り上がりとともに文化的な楽しみ方ができる場所が増えてほしい」と話します。映画を見て、食事をしながら語らう。神保町ならではのナイトライフが町の魅力を高めていく要素にもなりそうです。

時代とともに変化する神保町。町の新たな可能性を見出した人達が集う場として、これからますます楽しみになりそうです。



町との出会いを
どうつくりだすか

外国の方や若い人が多く訪れるようになった

東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。

ここでは、東京文化資源会議に関わる様々な専門家や実践家の方々が考える、現在の東京、これからの東京について想像するための論考やエッセイをお届けいたします。

神田、神保町、御茶ノ水、秋葉原。 世界でも有数のユニークな文化ゾーンをメディア化しよう

Yasunori
Tamaki

玉置泰紀 (エリアLOVEウォーカー総編集長)



ウォーカームック『神田・神保町・御茶ノ水Walker』

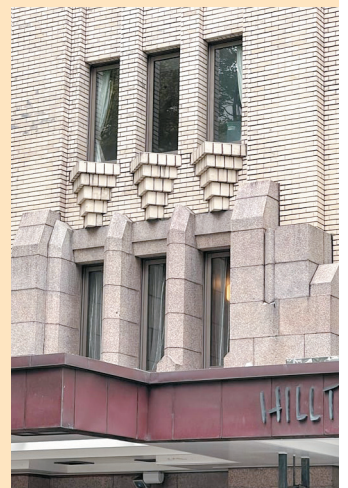
同懇談会では、「統一的公共性のあるルール」「起業副業を支える職住近接のまち」「大人が夜安心して遊べるまち」と言う3つの方針を掲げていて、「町々安全、商職繁盛 神田かいわい指標」というキャッチコピーも作っている。指標では、地域の肌感覚と専門的なデータをつなぎ合せていくことを目指しているが、東京文化資源会議が2023年に立ち上げた「神保町の夜からはじめるプロジェクト」でも、現在、神保町の古書店など様々な人たちにアンケートを実施するなど、改めて最新のデータを整備しながら、「地域の

ウォーカームック『神田・神保町・御茶ノ水Walker』を、角川アスキー総合研究所が発売したのは、2022年10月14日だった。筆者は、総編集長として、地域の人のいる紹介し、従来の観光本、ガイド本ではなく、このエリアに住む人たちの街づくりに多少なりとも並走するよう本づくりに心掛けた。東京文化資源会議の神田まちづくり懇談会にも参加しているが、この本では、メンバーの東京都大学の中島伸さんに「神田かいわい指標」を紹介してもらった。神田らしさをデータ化しようという試みだ。

同懇談会では、「統一的公共性のあるルール」「起業副業を支える職住近接のまち」「大人が夜安心して遊べるまち」と言う3つの方針を掲げていて、「町々安全、商職繁盛 神田かいわい指標」というキャッチコピーも作っている。指標では、地域の肌感覚と専門的なデータをつなぎ合せていくことを目指しているが、東京文化資源会議が2023年に立ち上げた「神保町の夜からはじめるプロジェクト」でも、現在、神保町の古書店など様々な人たちにアンケートを実施するなど、改めて最新のデータを整備しながら、「地域の

この肌感覚を討議したのが、2024年5月5日に開催された東京文化資源会議の「ひじりばし博覧会」だった。筆者が司会で、「神保町未来形—これからの担い手が語る」という座談会を開いたのだが、参加者は、大内学氏(書泉クラウンデブ次長)、大矢靖之氏(文芸春秋社)、小栗山美紀氏(ガールズ女将)、カラサキ・アユミ氏(古本収集家・漫画家)、草薙彩音氏(共立女子大学助教)、森川嘉一郎氏(明治大学准教授)という面々。

この肌感覚を討議したのが、2024年5月5日に開催された東京文化資源会議の「ひじりばし博覧会」だった。筆者が司会で、「神保町未来形—これからの担い手が語る」という座談会を開いたのだが、参加者は、大内学氏(書泉クラウンデブ次長)、大矢靖之氏(文芸春秋社)、小栗山美紀氏(ガールズ女将)、カラサキ・アユミ氏(古本収集家・漫画家)、草薙彩音氏(共立女子大学助教)、森川嘉一郎氏(明治大学准教授)という面々。



『神田・神保町・御茶ノ水Walker』で、筆者は「山の上ホテル」の項を執筆した。

この肌感覚を討議したのが、2024年5月5日に開催された東京文化資源会議の「ひじりばし博覧会」だった。筆者が司会で、「神保町未来形—これからの担い手が語る」という座談会を開いたのだが、参加者は、大内学氏(書泉クラウンデブ次長)、大矢靖之氏(文芸春秋社)、小栗山美紀氏(ガールズ女将)、カラサキ・アユミ氏(古本収集家・漫画家)、草薙彩音氏(共立女子大学助教)、森川嘉一郎氏(明治大学准教授)という面々。

東京文化資源会議は、2024年6月26日に日本出版クラブでシンポジウム「世界の神保町をめざす、知のプラネタリウム」の発信を企画し、7月12日には、共立女子大学でフォーラム「本の街・神保町の街並みの保全・活用の未来」を開催し、神保町についての議論は加速してきている。これらの取り組みで出てくる言葉の一つに「エリアマネジメント」がある。国や地方自治体など行政からの街づくり、大きな商業施設を核にした企業発の街づくり、このどちらでも重要なのは、地域に住む人、働く人たちの主体性であり、エリアアマネジメントだ。エリアに関わる個人や個店、企業、行政が議論して街づくりに取り組むことが求められている。

東京文化資源会議は、2024年6月26日に日本出版クラブでシンポジウム「世界の神保町をめざす、知のプラネタリウム」の発信を企画し、7月12日には、共立女子大学でフォーラム「本の街・神保町の街並みの保全・活用の未来」を開催し、神保町についての議論は加速してきている。これらの取り組みで出てくる言葉の一つに「エリアマネジメント」がある。国や地方自治体など行政からの街づくり、大きな商業施設を核にした企業発の街づくり、このどちらでも重要なのは、地域に住む人、働く人たちの主体性であり、エリアアマネジメントだ。エリアに関わる個人や個店、企業、行政が議論して街づくりに取り組むことが求められている。

ユーマー・ジェネレーター・メディア)に大きく舵を切った。最初にスタートしたのは西新宿LOVEウォーカーで、西新宿の狭いエリアの企業や神社、ホテル、百貨店、東京都と言った地域の人とメディアの方針を話し合い、実際に連載を持ってもらい、地域の情報インフラとして機能させている。テーマは「スマートシティ」。西新宿スマートシティ協議会という地元企業や通信会社、東京都が集まってこのテーマに取り組んで実践する組織があるが、ここにも正式メンバーとして西新宿LOVEウォーカーは参加している。

筆者が長くかかわってきた都市情報誌のウォーカー・シリーズだが、2021年からスタートさせたエリアLOVEウォーカーは、紙の本を少しでも多く売り、広告を出してもらうという従来のビジネスから、「メディア」を出したいというエリアにウォーカーのスキームを持ち込み、地域の人と一緒にメディアを作るというCGM(コンシューマー・ジェネレーター・メディア)に大きく舵を切った。最初にスタートしたのは西新宿LOVEウォーカーで、西新宿の狭いエリアの企業や神社、ホテル、百貨店、東京都と言った地域の人とメディアの方針を話し合い、実際に連載を持ってもらい、地域の情報インフラとして機能させている。テーマは「スマートシティ」。西新宿スマートシティ協議会という地元企業や通信会社、東京都が集まってこのテーマに取り組んで実践する組織があるが、ここにも正式メンバーとして西新宿LOVEウォーカーは参加している。

ユーマー・ジェネレーター・メディア)に大きく舵を切った。最初にスタートしたのは西新宿LOVEウォーカーで、西新宿の狭いエリアの企業や神社、ホテル、百貨店、東京都と言った地域の人とメディアの方針を話し合い、実際に連載を持ってもらい、地域の情報インフラとして機能させている。テーマは「スマートシティ」。西新宿スマートシティ協議会という地元企業や通信会社、東京都が集まってこのテーマに取り組んで実践する組織があるが、ここにも正式メンバーとして西新宿LOVEウォーカーは参加している。

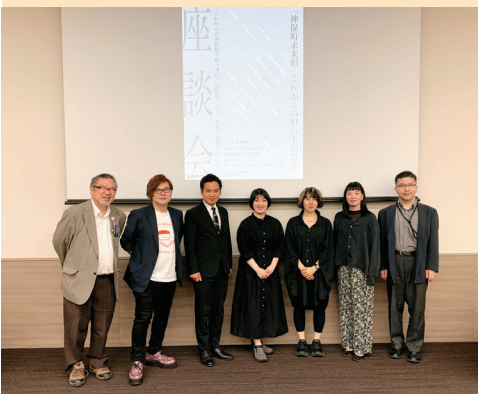
ユーマー・ジェネレーター・メディア)に大きく舵を切った。最初にスタートしたのは西新宿LOVEウォーカーで、西新宿の狭いエリアの企業や神社、ホテル、百貨店、東京都と言った地域の人とメディアの方針を話し合い、実際に連載を持ってもらい、地域の情報インフラとして機能させている。テーマは「スマートシティ」。西新宿スマートシティ協議会という地元企業や通信会社、東京都が集まってこのテーマに取り組んで実践する組織があるが、ここにも正式メンバーとして西新宿LOVEウォーカーは参加している。

街づくりのツールとしてメディアがあるのではなく、「街自体が、街そのものがメディア」なのではないか。デジタルツインのように、データに置き換えるのではなく、山縣有朋の「椿山荘」の庭園や、山形が京都に作った庭園「無鄰菴」が、地形を活かし、外に見える景色を借景して世界観を示しているように、重森三玲が東福寺の方丈北庭で石と苔を使った市松模様で宇宙を表現したように、街自体がメディアとして存在し得るのではないか。

街づくりのツールとしてメディアがあるのではなく、「街自体が、街そのものがメディア」なのではないか。デジタルツインのように、データに置き換えるのではなく、山縣有朋の「椿山荘」の庭園や、山形が京都に作った庭園「無鄰菴」が、地形を活かし、外に見える景色を借景して世界観を示しているように、重森三玲が東福寺の方丈北庭で石と苔を使った市松模様で宇宙を表現したように、街自体がメディアとして存在し得るのではないか。

街づくりのツールとしてメディアがあるのではなく、「街自体が、街そのものがメディア」なのではないか。デジタルツインのように、データに置き換えるのではなく、山縣有朋の「椿山荘」の庭園や、山形が京都に作った庭園「無鄰菴」が、地形を活かし、外に見える景色を借景して世界観を示しているように、重森三玲が東福寺の方丈北庭で石と苔を使った市松模様で宇宙を表現したように、街自体がメディアとして存在し得るのではないか。

街づくりのツールとしてメディアがあるのではなく、「街自体が、街そのものがメディア」なのではないか。デジタルツインのように、データに置き換えるのではなく、山縣有朋の「椿山荘」の庭園や、山形が京都に作った庭園「無鄰菴」が、地形を活かし、外に見える景色を借景して世界観を示しているように、重森三玲が東福寺の方丈北庭で石と苔を使った市松模様で宇宙を表現したように、街自体がメディアとして存在し得るのではないか。



「ひじりばし博覧会」の座談会「神保町未来形—これからの担い手が語る」の面々

神保町の
今を知る
「夜学」が開始

東京文化資源会議による「神保町の夜からはじめるプロジェクト」のプログラムの一環として、神保町に関わる様々な方々（神保町居住者、神保町で働く人、神保町愛好者など）が、その立



場を超えて横断的に出会い、神保町の夜を元気にする方策について自由に懇談する場として「神保町夜学」を月1回程度で開催しています。

これまでに計4回開催され、神保町を研究するスーザン・テイラー氏や、『近代出版研究』の小林昌樹氏、ほぼ日の奥野武範氏、神田明神の岸川雅範氏などにお話いただきました。神保町の魅力やこれからの神保町について、参加者と懇親をしながらも活発な意見が交わされています。今後、神保町でお店を営んでいらっしゃるオーナーなどにもご参加いただく予定です。ご関心のある方はぜひ事務局までご連絡ください。

書店ガイドや
夜の街歩きツアーで
神保町を楽しむ

観光庁による事業をもとに、神保町の新たな価値を発掘するための事業に取り組んでいます。施策として、神保町一体の店舗や来街者向けのヒアリング調査をもとに、今の神保町の来街者の様子を浮き彫りにする取り組みや、インバウンド向けの実証施策として、TOPPANさんによる自動翻訳技術を活用しながら、書店内のガイドツアーや出版関連セミナー、夜の神保町街歩きツアーなどを企画しています。

書店ガイドでは、外国の方だけでなく日本人も多く参加し、意外と知る機会が多かった古書店内の解説や各ジャンルの具体的な説明など、神保町ならではの豊富な資源を感じさせられました。

夜の街歩きツアーでは、ガイドによる解説を交えながら神保町の飲食店のご紹介など夜を楽しむためのガイドツアーとなり、参加者も満足度の高いものとなっています。今後、今回の実証をもとに具体的な企画へと落とし込むように取り組んでまいります。



編集後記

工学部は書籍を読まないと言文学部の先生にいつもイジられる。昔は分厚いプログラミングの書籍を手元に置いていたが、今はネットで必要な情報が手に入る。小説ですらウェブ発の作品が人気を集めている。しかし、神保町の古書店街を訪れるたびに、私は「本」というものの奥深さ、そして紙媒体ならではの価値を再認識する。古書を手にとると、それは単なる情報ではなく誰かの思考や感情が詰まった「物語」。そのものだと感じる。デジタルの情報とは異なり、古本は私たちの五感を刺激し想像力を掻き立てる。神保町で過ごす時間は、忙しい日常から少し離れ、自身と向き合う貴重な機会となる。(陸)

神保町の文化資源と向き合うプロジェクトが始まっています。夜学という神保町に関わる人達らが交流する学びの場や、今の神保町を分析調査する事業などが始まっています。古くて新しい、過去と未来が交差する街・神保町。多様な世代を惹きつける街の魅力や可能性を発掘していきながら、これからの都市のあり方について思いを馳せたいと思います。ぜひ、神保町の活動にご関心をお寄せいただけますと幸いです。(江)



[ティーチャ]東京文化資源会議ニュースレター No.23
読み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスをお届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会 デザイン：波井史生(PANKEY inc.) 執筆：江口晋太郎(TOKYObeta Ltd.)
写真：鈴木渉 印刷・製本：スターツ出版株式会社 発行人：東京文化資源会議 発行日：2024年11月30日
〒110-0005 東京都台東区上野2-11-1藤井ビル3階 TEL：03-5244-5450 MAIL：info@tcha.jp URL：http://tcha.jp/

